

十二室あり各室に室長あり舍生相互の學業の助成と親睦を計つてゐる、食堂、浴場、娛樂室等あり、新聞、教學、雜誌、新聞ラヂオあり、又運動不足勝なる學院生には劍道、相撲、野球等の設備あり戦時下の若人の体育に留意してゐる、尙遠足、旅行茸狩、茶話會等もあり時には隱藝をして爆笑圓滿な人間を作る様心掛けてゐる。

舍生の行事は起床午前四時半乃至五時半で本山の朝勤出仕、七時食法行つて食事、七時四十分登校、正午晝食、午後〇時四十分は午後登校、五時は入浴、この風呂での談笑は一日中の最も楽しい一時で夕食は五時、七時から自習勉強、一同は靜肅に九時の點檢まで行ひ舍監先生の夜の挨拶をす、十一時は消燈就寢ですべて動作は板木の鐘の報知により動作される、舍の南に持佛堂あり食前後一時間讀經三寶に法味を捧げ出征將士の武運を祈願す、その外舍監當直一名三日交代、舍内四名、日直一名、不淨二名、各當直あり舍内外の清潔と整頓に留意してゐる、舍の廊下傳ひに昨年四月より教師寮が二棟増築され師徒同居の感あり親しみの中にも師嚴道尊僧風教育が行はれ學びの舍としては最もよき處である。

皇紀二千六百年を迎へ、大聖逝いて六百五十年、國本愈々堅く、國威四海を歴して進張すると共に我が宗門又隆昌、聖戰の庭に教線は布かれて行つてゐる、國は總ゆる機關を統制ある一團となし、大政翼賛し進むべきと新体制は生れつゝあるが、これこそ大聖人一生の御理想と云はねばならぬ。

佛教も又歸する處は一佛乘で宗派も一團となり佛陀に歸り昭和の維新は名實共に健全なものとしなくてはならぬと思ふ。これには現非常時下をよく認識し、三大誓願を堅く念頭に立正安國の旗を押立て宗祖の第二陣第三陣と進む若き青年僧侶よ、第二日像。日親は我れなりと行學に止暇斷眠して此の舍より輩出されん事を切望して此の筆を止め、稿を脱す。

因みに昨年度の高等部卒業は十名と中等部二名を世に送つてゐる。

學友會々報

北鈴學友會

本會は北海道及樺太出身者にして、遙々祖山の學窓に笈を負ふた本化の學僧を以て會員としてゐるが、本會の誕生は昭和八年で恰度今年は八星霜を迎へることになる。勿論それ已前に於ても何かしらさうした形式のもとに、郷里を同じうする學徒たちの親睦と融和をはかる可く機關のあつたことは想像するに難くはないのであるが、然し此の事はすべて現在學徒の吾々には未知の世界に屬することである。吾々の郷里出身者の先輩のうちでも、今はすでに化境を異にされた藤田光肇師や現在東京に化境を移してゐられる荒木義榮師等々は最も親しみと信頼とを

寄せてゐる、所謂吾等の先輩の代表者とも云ふ可き人々であるが、當時の先輩たちが残して置いてくれたと云ふ記録は一紙もない。古い時代のことについては何等確證も持たないので、はつきりとした事は云へないが、宗門史に依ればすでに持師によつて六百四十六年の昔に於て北海の弘通は成されてゐるのである。然しながら現在の北海樺太方面に於ける吾が教線地區の實情からして考へるならば、郷里の寺院から子弟を教養する爲に祖山へ遊學せしめたと云ふことは恐らく徳川末期から明治初年にかけて可否更にもつと後世に屬することではないだらうか？

吾々が祖山に負笈したのは昭和八年の春であつたが、北海樺太からの出身者は全員十名足らずで、勿論學友會と云つた形式のものもなく、至つて寂寥を感じたのである。それが同郷の好みと云つた感情から遂に本會の誕生を見るに至つたもので、會の名稱などにしても、北海の谷間に花咲く鈴蘭の如く純真にして然も高雅な人々の集ひと云ふ意味からして北鈴會と名稱することにした。

然も發會の日より、當時大輿隨身長並に母校の教授であつた望月徳英先生を北海御出身と云ふ所から本會の總裁として仰ぎ爾來年々會員は増加し益々會は發展して來たのである。一時は會員數の如きも三十名を突破すると云ふ盛況を示してゐたが、曩に總裁望月先生が郷里函館實行寺に榮轉され、次いで會員幹事中よりも幾多の事變應召者を出し、會の進展は一時停滯したかの如き盛を抱かしたるも、近々又々會員組織を一變して、

更に本會發展を目標に一段の努力を拂つてゐる。

因に本會の趣旨は同郷出身會員相互間に於ける親睦をはかり學業の餘暇に於て地方布教の實習、其他將來寺門の經營及教線擴張等々に於て緊密なる連絡提携を本會々員自体より之を形成す可く誕生したもの即ち北鈴會である。然しながらお互の事由により趣旨の全面的履行は到底望まれないにしても、その一分でも實行出來たらと會員は眞劍な歩みを續け不斷の努力を拂つてゐる。

東北學友會

本會は東北六縣内に法籍若くは族籍を有する者にして祖山に負笈してゐる本化の學徒を以て會員とし異体同心の祖訓を確持し、會員相互の親睦、先輩諸師との連絡を密にし他日布教戰線の第一線に活躍するに足る法器となるべく日夜行學に精進してゐるのであつて會としての組織的誕生は郷土御出身であり現在母校の教授である武田海正先生の記録に依れば大正十三年にして勿論其以前も郷土を同じふする學生の親睦融和上屢々會合し來りたりしが漸次負笈する學徒其數を増加するに至り自然、會組織の必要を痛感し、當時學生として勉學してゐた現母校教授加藤雲洞先生の御盡力によつて確固たる組織的第一歩を印したのである。其後青森縣御出身の江利山義顯先生、本學院教授となるや獻身的指導により會の運動活潑となり其隆盛見るべきものがあつた。のみならず宗祖をして日域の比叡にも勝れたる

山であると末法萬年の闇を照す大法燈の基となさしめた身延山寄進の大檀越波木井實長公の子孫永住の地を郷土に持つ誇りとを有し且御後裔たる南部男爵閣下を名譽顧問に頂き此處に星霜十七年を閲し幾多の人を社會の活舞台に送り、支那事變、端を開くや亦數名を戰野に出し現在稍々其數を減じある状態であるが依然其の親睦と融和とは不變に且強固の一路をたどりつゝあり。會員一同益々行學二道を練磨し新体制下にある國家の宗教家に對する要求と郷土の實情とを總ゆる角度より考察し諸先生諸先輩の御指導により毎學期開催される例會及臨時會合の都度布教法の研究に其他必要事項等の對策に加藤武田兩顧問先生の御高見を賜りやがて學成り錦を郷土に飾る曉は郷土の天地に皆歸妙法の大燈火を高く掲げんものと各自の任務に向つて奮進してゐる。

(安田記)

鷲峯學友會

尊ひ御佛の永久に居ます國天竺靈鷲山を初め天台山、比叡山の如き御山に尙ほ勝れても劣らざる我が靈山身延!

山に吹く風! 流るゝ水の音迄も甚深の妙法を唱へるが如く一本一草皆信仰に生きんとする靈地に此の深甚の法悦に滴らんと聚ひ來る者二百有餘名、此等負笈の徒は各自聖訓の「行學二道を勵み星霜の功を積み給へし後は弘法廣宣の一助として郷關に勇猛精進せん」との大理想を胸に秘めて來りし者也。

斯如き大理想に燃えて東西南北より從來せる青年宗教家の曉を鑑み且つ聖訓の「異体同心」に基き生じ來りしが本會也因みに會則中に之を見るに、

「本會は會員の相互親睦を計ると共に將來の布教傳導に貢獻するを以て目的とす」の一條によりても明なり。

振り返りて本會を見るに初は單なる甲陽山梨に法籍俗籍有る者に限り會の名も甲陽學友會と云ひし也。

然るに日増しに目的の實を擧げ大正十四年には、東京府、山梨、静岡、神奈川、長野、千葉、群馬、茨城、埼玉、栃木の各縣を合した一府九縣の學徒よりなる鷲峯學友會なる成立を見た。以上の如く會員の充實を見る一方内容に於ても進歩を來たし本會は贊助會員、特別會員、正會員なる内容組織を見、顧問に柴田總務親下會長に松木先生副會長に中村先生を載き今日では實に會員五十餘名の多數を數へるに至れり。此は聖訓の「日蓮が弟子檀那は此の山を本として參るべし」に範りしものなり。猶先輩中には宗門的に社會的に目醒しき貢獻して居る者少なからず。此は本會の誇りなるべし。

斯如く社會的に宗門的に有爲なる青年宗教家を一人でも多く送らんが爲會では辯論部、文學部を設け演説の練習に文學の練習に凡ゆる便宜を計りき其の成果は日増しに高まり善男善女の心の慰安に十分となれり。斯如く日一日と隆盛の一途を進みつゝ有る學友會は祖廟中心の旗なびかせて宗門の中心を叫びつゝ有る身延の名聲と共にいやはが上にも昇らなければならぬ状態に

在り此の時、我が鷲峯學友會なる文字即ち宗門の否一闇浮提統一の聖地たるの意は重大となつて來るので有る。

かく考へる時吾が學友會の遠き將來への洋々たる英姿と第二の日運は我が會よりの感を益々深くすると同時に約束付けられるもので有る。時正に二千六百年の聖日を迎へ又學友會の此の大隆盛なる今日の姿を迎へる事が出來たとはなんたる幸ぞ、願はくば吾が學友會の名聲が宗門の題目の御旗が四海になびくが如く四海に聞へ不滅の光を放たん事を。

九州學友會

傳統ある本會は九州出身者を以て大正六年四月二十九日天長節の佳節に際して設立せられた。已降九州男子の意氣を遺憾なく發揮し、大正年間より昭和の初年頃迄は會員數四十名を突破し當時の有様を想像しても如何に盛大であり、如何に宗祖に對する思慕の念深かりしかを思ひ出させる。毎年殊に特記すべきは二月十五日釋尊御入滅の日は題目修行をなし法恩謝徳に浸り明けて十六日宗祖御降誕會の聖日を期し法華經廣宣流布の大願成就の祈願をなして後、

ポンチ可愛いねんねしな

泣く子も黙つた三勇士

三勇士のきもつたま

たまげた チャンコロスツポンく

の歌に調子を取り假裝行列を行ひ、異体同心宗祖の御降誕を祝

學友會々報

福し來つた。然るに支那事變勃發するや國を擧ての總動員會員の意の如くならず、惜しくも中絶した觀を呈す。

こゝに於てか會員こぞつて國防獻金を思ひ立ち、昭和十二年十月二十日身延町公會堂に於て獻金映畫大會を催し其の結果五十六圓十九錢の國防獻金をなし得た事は、云ふ迄もなく會員諸兄の東奔西走努力の賜に外ならず。又會員の一致團結り設立以來、炎熱の中もいとはず夏季布教も屢々行はれた。

昭和十二年十一月一日身延山布教師丸山順弘先生特別の御厚意により花之坊本堂を借用なし、毎火曜日午後六時より約三時間布教研究會を催し來つた。亦先生を會の顧問と仰ぎ指導者として信頼し且尊敬の的として過し來りしが、會員諸君の誓願も空しく昭和十五年六月八日遂に法蓮を異にせり。

過ぎし五月十四日(火曜日)の布教研究の際病軀にも拘らず自己の體驗に基く信仰を説法され、會員の覺醒を促された。今になつて誰があの時説法が會員への遺言であり教訓であつたと思ひませうか、十日の本葬に參列した會員一同感極まつて潜々たる涙に袖を搾り、悲哀の念を起さざるを得なかつた、其の後會は淋しく振はず一時中絶せるかの如く思はれたが、此度故丸山先生に替つて里見泰穩先生、深川龍丈先生の二師の出馬を仰いで、以前に倍する活氣を呈し來つた。會員は宜く會の爲乃至は將に宗祖の膝下を慕ひ來らんとする後輩の爲に里見深川兩先生のよき指導の許に一致團結異体同心の祖風を奉戴し故丸山先生の冥福を祈ると共に萬年の基礎を築くのだ。かくする事

に依つて先輩の意志を繼承し、祖山に九州學友會ありとの傳統を今後より一層に強め、先師先哲の偉業に勝つても劣らぬ様に努力しようではありませんか。

會員一同故丸山先生の靈に向つて報恩謝徳の題目を唱へて筆を擱く次第であります。

同窓會文學部へ寄贈書籍

大崎學報	立正大學宗學研究室殿
立正史學	立正大學史學會殿
叡山學報	比叡山專修院殿
摩訶行	京都佛教專門學校殿
信人	松楓居殿
求道	求道園殿
山柿	山柿會殿
其他新聞雜誌等	各位殿

祖山學院卒業論文題目

二神勸請義ニ就テ	齋藤貫誠
壽量所顯本覺三身論	田村啓孝
本覺思想ノ展開ト日蓮教學ヘノ影響	平岡正學
信心成佛論	木島智要
祖書ニ顯レタル本尊人法論	田中靜光
本化攝折論	藤澤玄唱
當家人法本尊論	岩成光運
首題妙體論	穂坂眞彌
清水、山川兩師ノ當家教學ニ於ケル巴心義論	細井泰行
本化攝折論	前田超光
台當兩家ニ於ケル題目異相ニ就テ	三枝光純
當家の妙行を論ず	樽井顛正
天台大師と宗祖の壽量佛陀觀	辻義雄
攝折論	佐野海山